

高等教育研究センター

Research Center for Higher Education

Newsletter

No.037

目次

2017.12

- 平成28年度学内版GP成果報告
西 一夫 教授
- 初年次教育(大学生基礎カゼミ)を
担当して感じたこと
山沢 清人 名誉教授
- 高等教育研究センター年報

信州大学 | 高等教育研究センター
SHINSHU UNIVERSITY

平成28年度学内版GP成果報告 vol.3

前号に引続き、平成28年度学内版GPに採択された取り組みをご紹介します。

また、平成30年度の学内版GPの応募〆切は平成30年1月19日までとなっております。皆さまからの多様な取り組みの応募をよろしくお願いいたします。

H28年度学内版GP成果報告 学術研究院教育学系 西 一夫 教授

①信州の地域文化資産を活用した「信州学」学修プログラムの構築—高大接続を意識した初年次教育—

はじめに

近年、中等教育において地域理解に関する教育が重視されている。本県においても長野県教育委員会が学力向上施策の一つとして「児童生徒がふるさとに誇りを持ち大切に
する心情を育む「信州学」を推進」することが明示され、28年度には県内の公立高等学校で「信州学」の実施100%が達成目標とされた。

このような教育施策を受けて高等教育、なかでも初年次教育において地域密着・連携型の教育を実現するものとして、本学修プログラムを提案した。

【主な実施地・参加者】

- ①4/26（松本文学散歩）教育学部1年生12名，教員3名
- ②6/24（長野文学散歩）教育学部2～4年生12名，教員1名
- ③7/1（長野文学散歩）教育学部2年生12名，教員4名
- ④10/23（軽井沢文学散歩）一般参加者40名，教育学部学生9名，教員1名
- ⑤10/30（松本文学散歩）教育学部1年生15名，教員4名

活動内容

1. あがたの森文化会館・松本市美術館

（4/26：松本文学散歩）

①「信大の歴史」を知る機会として、旧制高等学校の保存会館である「あがたの森文化会館」にて、人文学部・文理学部と旧制松本高等学校との関係や、近代大学制度などについて独自資料を用いてミニレクチャーを行い、関係資料の視察を行う。

旧制松本高等学校校舎で近代建築や授業内容についての補足説明を行う。

初回の実施であることから、資料は申請者が作成したも

ものを用いている。

②「信州の芸術」を知る機会として松本市美術館へ移動して草間彌生の作品鑑賞、上條信山の書作品の鑑賞と学芸員による解説を実施した。独自資料のみならず、学芸員の資料も用いての解説・鑑賞となった。

美術館は松本市との連携協定に基づいて減免申請を行い、あがたの森文化会館では企画主旨に理解をいただき、いずれも入館料を免除された。

2. 往生寺文学史跡探訪（6/24：長野文学散歩）

中等教育教員免許（国語科）授業科目のオプションルツアーとして企画・運営した。善光寺西方の山麓にある往生寺までの史跡と寺内の文学碑（芭蕉・一茶・藤村等）の視察と講義を行う。資料は独自資料を用いた。西長野キャンパス周辺の文学環境を体験的に知るための企画・運営と位置付けた。



長野文学散歩集合写真

3. 堀辰雄文学館・追分（10/23：軽井沢文学散歩）

堀辰雄文学館での企画展（堀辰雄と古典文学）での出前講座にあわせた講演と周辺の文学史跡を見学した。その際の現地説明には、高大の連携協力的一端として、平成27年8月に小諸市を会場として開催された「北信越文芸道場」にあわせて関係の生徒が編集した『信濃追分と小諸—文学散策の葉』（非売品）を増刷して活用した。



実施成果

「1」の企画において、終了後アンケートの質問項目「松本を知る意義は何か」には、以下のような記述が見られた。

- ①大学生活をより豊かなものにし、有意義な時間が過ごせるようになる。
- ②松本を知ることで、素晴らしい環境で勉強を頑張ろうと思った。
- ③何も知らないままでは、ただ「そこにいる」だけで終わってしまうが、その土地のことを知ることで「その地と

- 共に暮らす」意識が生まれた。
- ④地元だからこそ松本のことをもっと知りたい。
- ⑤それぞれの地域の伝統や文化があることを知る機会になる。

①②は自己肯定感を高める要素が認められ、③～⑤は地元との関係を強く意識しながら生活しようとする地域思考の芽生えが認められる。

これらの成果と課題とを受けて、平成29年度は教養ゼミ「シルシル信知るゼミ」を開講して本格実施に至っている。



②附属図書館と地域図書館・施設を活用した司書教諭養成プログラム －「臨床の知」に基づく読書指導・調べ学習の実践的カリキュラム－



はじめに

学校図書館司書教諭は、各校種に応じた実践的な指導を行うのみならず、授業実践と図書館活動とを橋渡しする重要な役割を担っている。

本企画は司書教諭が担う実践的な活動を「理論と省察の往還」に基づく主体的学修を通して体感することを目的とする。

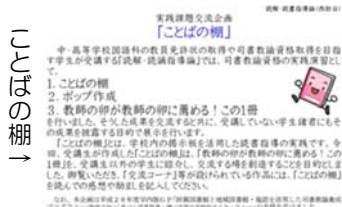
【関連授業・参加者】[①②：司書教諭資格科目]

- ①読解・読書指導論（後期）約75名
- ②学級経営と学校図書館（夏期集中）約20名
- ③日本文学基礎（前期）約70名
- ④古典文学史（後期）約60名

活動内容

1. 附属図書館の協働学修スペースを活用した展示企画 （関連授業①）

附属図書館との連携企画として、授業で作成した新刊図書のパップ展示と、受講生が作成した「ことばの棚」とを展示して交流活動を行う。新刊図書のパップ展示は、学部施設の他の場所（中校舎リフレッシュルーム）でも同時展示して交流の場を設けた。



新刊図書のパップ展示

2. 読書指導の実践的な取組（関連授業①）

①「読書生活デザインノート」を活用して実践的な読書指導の方法を習得（具体的な活動：読書交流・コメント記入作業等）



- ②紹介冊子「教師の卵が教師の卵に薦める！この1冊」の作成を通して読書への導入追体験
- ③交流スペース「ことばの棚」の作成を通して、学校現場での図書館活動の実践的な活動体験

3. 文化資産と読書活動との連携（関連授業②～④）

- ①「西長野の教育と文学」と題する紹介ポスター作成・展示交流
- ②「信州の文学」の題目で調べ学習を通じたレポート作成と交流会の実施
- ③地域文化資産を調査・報告するためのフィールドワークを実施して、「私たちの善光寺縁起」を作成し交流会を実施

実施成果

- ①複数授業を横断的に連携させることにより、カリキュラムの見直しができる。
- ②附属図書館の協働学修スペースを活用して、図書館活動に本企画を位置付けた。
- ③具体的な成果物の作成によって成果を視覚化でき、自己評価においても高評価を得た。
- ④各授業での評価観点の整理ができた。
- ⑤受講生は実践的に司書教諭の業務を体得でき、実践的な学びの場を形成できた。



初年次教育(大学生基礎力ゼミ)を担当して感じたこと



4月からの半年間初年次教育(授業名:大学生基礎力ゼミ)を担当する機会が与えられました。新米教員のため受講生数は17名と少人数で、肌理の細かな指導・対応ができ、充実した5か月を過ごすことができました。

この授業は、学生が自分の生活と学習に責任を持てる自立した大学生になることを目標とするアカデミック・リテラシー教育^{*1, *2}と呼ばれるものです。大学では、高校とは違い、学生が自ら学び、自ら課題を見つけ、その解決に努力することが重要であると説きます。大学生として学びへの新たな覚悟を持ってもらうのです。

信州大学の初年次セミナーは、各学部で実施される専門教育科目と大学生基礎力ゼミの二本立て型です。「大学生基礎力ゼミ」は高校から大学への速やかな移行に焦点を置き、論理的な文章作成の能力(狭義のアカデミック・リテラシー)獲得及び遠距離分散キャンパス型大学の弱点を補うべく「学部横断の人的交流」のなかでの人間的成長を大きな達成目標としています。

さらに、授業カリキュラムの中に「学生相談センター」や「総合健康安全センター」など学内施設における授業外学修の時間を設け、学生個々の問題の早期発見と早期対応を可能としていることが大きな特長です。

授業の評価ですが、授業終了後のアンケート結果から見ると、授業目標に達成したと思う学生は85.6%で、授業の達成感89.7%の学生が満足しているという、学生満足度が高い授業と言えます。

また、授業の効果は、検証を2016年度より開始したばかりではありますが、成績下位群の受講者と非受講者を比較すると、受講者の二年次の成績は有意に高いこと、すなわち成績下位群の底上げが図られているとの結果を得ています。

授業を担当して感じたことは次の3点です。

第1は、大学生基礎力ゼミによって学生の学術的な文章の読み書き能力(アカデミック・リテラシー)をきちっと育てていることです。このことは、毎週のふりかえり及び2回の課題レポートを添削・採点して強く感じられます。

第2は、グループワーク・学習による協働作業の習得です。これは、シナリオ作りから演技の確定まで、課題に対応した劇を実演できたことで十分に評価できます。

第3は、アサーションなど^{*3, *4}の手法を使った高度なコミュニケーション能力の習得が、受講生全体に対して一定レベルで修得させられたことであります。

10年ぐらい前から重視されてきた「初年次教育」は、現在も多くの大学で実施されています。しかし、実際に実施されているプログラムを見る限り、大学生必須の能力を一定レベルで受講者全員に習得させている例は非常に少ないと言えます。

このような全国的な初年次教育の現状を鑑みると、本学の大学生基礎力ゼミは、将来に向けても、信州大学初年次教育の大きな特長になると考えます。

今年は14クラス開講で276名の履修でしたが、新入生は2000名ですから受講生は14%と少数です。しかし、抽選に漏れた履修希望者は585人もいました。担当教員の不足で開講クラスを増やせないのが現状です。本授業では教員が授業実施に費やす時間はかなり多くはなりません。しかし、初年次教育は1~4年次までの成長を視野に入れた教育カリキュラムです。学部で専門を教える教員が担当すると、また教育効果も増大する可能性もあると考えます。

参考文献

- *1 例えば、高松正毅：高崎経済大学論集、51, 3, 51-65(2008)
- *2 例えば、楠見孝、田中優子、平山るみ：Cognitive Studies, 19, 1, 69-82 (2012)
- *3 例えば、平木典子：アサーションの心、朝日新聞出版(2015)
- *4 R.R.ベアマン、S.C.アルブリットン著、園田由紀訳：MBTI®へのいざない、JPP株式会社(2012)



(山沢 清人)

大学生基礎力ゼミのねらい(シラバスより抜粋)

【授業の達成目標】

自分の生活と学習に責任を持てる、自立した大学生になる。

【授業のねらい】

学生が大学に適応し、早い段階で自立した学生になることを支援するとともに、学生として必要な技術と態度を身につける。学生は大学で求められる学業の水準を学ぶとともに、その水準に達するための正しい努力をし、基本的な技術を身につける。



平成29年度 高等教育研究センター年報



加藤 鉦三（高等教育研究センター 副センター長）

センター全体として、今年度は特に、「GPAが教育成果の指標として機能する形」の見える化に注力してきました。それは次のものであり、①学生が努力することでそれぞれの授業目標を達成する。②授業目標への到達度で成績評価をすることで、クラスの教育成果の指標になる。③従って、集的にカリキュラム全体で集積したGPAがそのクラスの教育成果の指標になる。④その指標の妥当性は授業アンケートで担保される。この方向性は平成23年度に制定された「教育課程編成・実施の方針」で規定路線となっていたものです。平成28年度の授業アンケートの改訂で材料が出揃ったところです。

個人としては、科研費獲得に関するFDを2件、その他のFDを数件行いました。中期計画関係では、例年の通り、中期計画の円滑な遂行を目的に、全学部を年に2回訪問し懇談会を持ちました。

言語学関係では、平成28年度に獲得した科研費による研究を継続し、その研究成果を言語処理学会第23回年次大会(NLP2017)で「デグの意識・逐語訳ダブル対訳コーパス―主語化の場合―」というタイトルで発表しました。

矢部 正之（高等教育研究センター 教授）

高等教育に関わる研究開発の取組は、情報通信技術を利用した教育を中心に行っています。これに関して、「教育ビッグデータをいかに活用すべきか - IR は誰のため? -」（2017PC Conference論文集, 231-232 (2017)）などを発表しました。また、この分野に関わるケータイ活用教育研究会を毎年松本で開催しており、本年は8月22日に次世代大学教育研究会と共催で、「フィードバックと主体的な学び」をテーマで開催しました。

また、昨年度から引き続き、長野県若年層人材戦略研究会の会長として、キャリア教育と若年層の地方人材還流に関する研究会や、それを基盤とした「信州エクスターンシップ」を長野県、JA等と協力して実施しました。

加藤 善子（高等教育研究センター 准教授）

学内では、昨年度に引き続き、「大学生基礎力ゼミ」のコーディネーターと担当教員へのFDとサポート、そして全学を対象としたFDを担当しています。今年も、アクティブ・ラーニングの推奨、シラバスの書き方や点検のポイント、授業デザインに関するFDを中心に実施しました。

研究では、科研費「初年次セミナー受講生の『ふりかえり』を基盤とした学習支援の在り方に関する研究」の2年目に入り、加藤鉦三教授との共著論文を上梓し、加藤善子・李敏・加藤鉦三「学修支援の理論と実践、およびデータとの対話」と題して高等教育学会第20回大会（於：東北大学）にて発表を行いました。その結果は、加藤善子・李敏・古里由香里・加藤鉦三「学習支援を組み込んだ初年次セミナーの意義」（『大学論集』第50集に掲載決定）としてまとめることができました。もう一つの研究テーマである、戦前期の教育に関しては、「歴史研究に開かれた学籍データベース構築の課題―旧制兵庫県立第一中学校を事例として―」を『信州大学総合人間科学研究』第11号に上梓しました。

李 敏（高等教育研究センター 講師）

学内では、「学習時間調査」を中心に分析を行い、調査の結果をもとに論文を執筆しました（「学習時間と学習成果との関係」『総合人間科学研究』第11号, pp.59-72, 2017年）。また、人文系大学院改組のために、進学の一斉調査及び修了者採用の一斉調査の実施と分析に着手しました。

研究では、加藤善子氏との共同発表以外に、個人科研「日本留学の効果」の知見について、第53回日本比較教育学会において発表を行いました。留学研究に関しては、今年度新たな研究費が採択され、より深い研究を進めています。それと併行して、外国人教員の比較研究、人文社会科学教育の国際比較研究にも取り組んでいます。

古里 由香里（高等教育研究センター 助教）

昨年度から着手した、学生調査データ分析・大学生基礎力ゼミの効果の検証をしました。学生調査データを用いた分析結果のひとつは、古里 由香里(2017)「大学生の学修場所パターンに関する分析：潜在クラス分析を用いた計量的アプローチ」『信州大学総合人間科学研究(11)』に上梓しました。今年度からは、教員による授業アンケートも開始し、学生による授業アンケートとともに、分析をすすめています。研究活動としては、2015年社会階層と社会移動調査研究会の高齢者年金の格差問題に関する分析・発表を行うのと並行し、電気通信財団研究調査助成社会科学系の研究助成によるSNS研究を国際学会(AASP2017)で発表しました。

編集後記

教員の方向けに、eALPS教職員サイトにオンラインFDを作成いたしました。ぜひご活用ください。私事ですが、4月に学務課に配属され、あっという間に9か月が経ちました。日々学ぶことばかりで、大学業務の幅広さを実感しています。

これからさらに寒さが厳しくなりますが、体調管理を怠らずに過ごしていきたいです。

(学務課教務グループ 関 みのり)

